Aiyugo　アイユーゴー通信　（特集）第１８号

～国際協力活動に必要な英語力をつける～

ダラット大学社会福祉学部と近畿大学総合社会学部の協働プロジェクト

（特活)アイユーゴー理事　新田香織

ベトナム・ダラット大学社会福祉学部と近畿大学総合社会学部の学生たちが協働して、ラムドン県カッティエン郡(ホーチミン市から北へ自動車で5時間）に住む少数民族の生活調査を行いました。

本会理事である近畿大学総合社会学部教授の新田香織氏は、約半年間、現地調査の準備としての英語指導に取り組み、国際協力事業のアドバイザーとして、同学生たちとベトナムのラムドン省カッティエン郡に入りました。以下は新田香織氏の報告です。

はじめに

2010 年に新設された近畿大学総合社会学部では、「使うための英語力育成」を目指して様々な工夫を取り入れています。その一環として 2009 年 4 月から 2012 年 3 月まで文科省の科学研究費による助成プロジェクトとして、「国際協力現場で求められる統合的英語力育成のためのプログラムの構築と実践」に取り組みました。

この現地調査実施にあったっては、ダラット大学のスタッフとして、社会福祉学部長 Tan(タン)教授、前学部長 Tai(タイ)教授、講師 Hien(ヒン)さん、Puhn(プン)さん、そして通訳兼コーディネーターとしてホーチミン大学教授 Quan(クァン)さん、Minh(ミン)さん、近畿大学のスタッフとして保本正芳先生にお世話になりました。また現地で使用したアンケート作成に鈴木伸二先生のご協力をいただきました。ここに感謝の意を表したいと思います。

1. プロジェクト参加者

・近畿大学学生 4 名　・ダラット大学学生 3 名

2. 調査及び発表の実施場所、日程

・水質及び聴き取り調査：ラムドン省カッティエン郡ドンナイ町ブンゴ村（2 月 11・12 日）

・調査準備及び発表：ダラット大学（2 月 13 日・14 日）

3. プロジェクト手順（2011 年 9 月～2012 年 2 月）

(1) SKYPE 使用による準備（3 回：11 月・12 月・2 月）

・目的：調査のパートナーとしてお互いの英語に慣れること

・村での調査内容の打ち合わせ

(2)メールによるアンケート調査表の完成（1 月・2 月）

・近畿大学の学生が英語でアンケート項目を作成（焦点は貧困・教育・ジェンダー）

・ダラット大学の学生が項目や表現について修正、また英語からベトナム語への翻訳を各項目に挿入

(3)ブンゴ村における調査（2 月 11・12 日）

・聴き取り調査：日本人学生とベトナム人学生でペアとなり、それぞれ 10 数軒ずつ、合計 34 軒のデータを収集

・水質調査：日本人学生の一人は、総合社会学部保本講師の指導のもとで村近くを流れるドンナイ川の水質調査を合計 9 回実施（パックテスト使用）

(4)ダラット大学にて調査結果の分析と発表準備

4. 水質調査結果

アンモニウム態窒素とリン酸態リンが高いことから、比較的近くの場所から，生活排水や農業廃水などが流れ込んでいると考えられる。また村人の要請で一回のみ実施した井戸水の簡易検査の結果はリン酸態リンの値が少し高く、今後とも継続検査が必要と思われる。

5. 聴き取り調査結果

調査した 34 軒のうち 32 軒が少数民族マー族で、15 年前に居住地にダムが建設されるため、ブンゴ村に強制移住となり、住宅を提供されたという。所得は基準を下回っているが、子どもの教育には熱心であることがわかった。ベトナム語を話せない人たちにとってはまず言語の壁によって貧困から抜け出せないという悪循環があった。

おわりに

ベトナムに出発する前に行った約半年にわたる英語力に関する準備は十分とは言えなかったが、現地における学生同士のコミュニケーション、さらに発表は学生の予想以上のがんばりと適応力により成功に終わりました。国際協力現場においては、何よりも「そこで何をしたいのか」という意識が重要であり、その意識があれば言葉の壁は乗り越えられることが実証できたと思います。それでも双方の学生たちは「もっと深いコミュニケーションを実現するために、さらに

英語力をつけたい」と言っており、それぞれの国でがんばっています。半年近く経った今でも SKYPE、facebook、そして email を用いた交流が継続しています。今後の彼らの姿が楽しみです。

参加メンバー